

「歴史を“科学的に”考える～旧石器ねつ造を題材として～」

曾我雄司

【抄録】 2010年度、2011年度と高校1年生SLPⅡ「自然と科学」後期の社会グループで取り上げた授業の紹介である。2000年11月に発覚した旧石器ねつ造問題について取り上げ、「どうしてねつ造できたのか」という観点から、考古学の発掘の方法・考古学の世界にある問題に気付かせるのが、目的である。本授業を通じて歴史像は地道な検証の上に積み上げていく姿勢が大事であることなどを強調し、生徒たちに科学的態度とはいかなるものであるかを考えさせる機会とした。

【キーワード】 SLPⅡ 考古学 旧石器ねつ造問題 科学的態度

1. はじめに

本稿は、高校1年生のSLPⅡ「自然と科学」後期の社会グループの一時間の授業を取り上げたものである。SLPⅡ全体の構成やSLPⅡ「自然と科学」の取り組みは、本紀要の該当箇所および過去の紀要の該当箇所をご参照いただきたい。筆者は2010年度・2011年度と高校1年生のSLPⅡ「自然と科学」後期の社会グループの授業を担当してきたが、そこでは「科学的態度」を養うことを主眼に、歴史史資料の取り扱い方を題材として取り上げ、史資料から歴史像を正しく組み立てることの大事さを考えさせる授業を展開してきた。

その題材の一つとして取り上げたのが、2000年11月に発覚した旧石器ねつ造問題であった。旧石器ねつ造問題とは、発掘調査者が以前に掘り出された石器を埋め直して旧石器として掘り出していたことが発覚した事件であり、それまでの旧石器時代の歴史像に大きな影響を与えた事件である。考古学界における旧石器時代研究のみならず、教科書・資料集などにも大幅な変更をもたらした事件であったこともあり、ねつ造問題の発覚後、筆者は高校3年生の日本史Bの授業開きの際にこのテーマを取り上げてきた。そこでは「なぜ、このようなことをしたのか」という動機にはあえてあまり触れずに、「なぜ、このようなことができたのか」という考古学の方法論に触れていた。動機は、結論的には本人にしか語り得ないものだからである。

2010年夏に、歴史教育者協議会の全国大会が愛知県で行われたが、その分科会で高校の授業開きで旧石器ねつ造問題を取り上げたという南山高等・中学校の中尾浩康氏の報告に接した。氏のアプローチは主に動機の追及にある。個人攻撃ではなく「社会全体の中での問題」として理解させることに主眼をおいて、社会は暗記ではない、教科書はすべて正しいというのではないことを伝え、歴史を考えるということは何かを問いかけるもので

あった。報告で語られる授業構成の緻密さと視野の広さに感心させられたが、それ以上に報告後の意見交換の中で得た「今の生徒たちはねつ造事件自体をしらない」という情報が大きなヒントとなった。

常識と思っていること、常識と思っている生徒たちが思い込んでいる教科書が、実はねつ造事件によって組み立てられた歴史像に多く依拠していたこと、ここを起点にして方法論としての考古学についてふれ、正しい方法論の上に物事を考える科学的な態度を生徒にもたせることはできないか、ということで構想・実践したのが、この授業である。SLPⅡという合科授業における授業案であるが、日本史の通常授業の中でも実践可能な内容と思われるので、教科研究の章に入れさせていただいた。

2. 授業の展開

(1) 授業の用意

まず同一出版社の教科書で、捏造前（2000年以前）の教科書と捏造後（2001年）の教科書を用意する。これは、記述内容の変化を比較するためである。筆者は見開きで内容がまとめられていることなどから、実教出版社の「高校日本史B」を使用した。

また岡村道雄『縄文の世紀』（講談社版『日本の歴史』01旧版、1999）の上高森遺跡発掘に関する箇所、毎日新聞旧石器遺跡取材班『発掘捏造』（毎日新聞社、2001）の発掘を取り巻く環境に関する箇所を、プリント用資料として引用した。

上記資料を組み合わせて、プリントA（捏造発覚前の教科書／『縄文の世紀』）、プリントB（捏造発覚後の教科書／『発掘捏造』）の2種類のプリントを作成した。

他にねつ造問題をスクープした2000年11月5日の毎日新聞記事を用意した。

(2) 指導案と留意点

この授業は、2010年度は社会グループのみを対象に行

い、2011年度は一クラス全体を対象として行った。基本的に講義型であるので、人数の多少には左右されず実践が可能ということである。

展開1のねらいは「教科書は正しい」という認識に疑問を投げかけることにある。展開1-①では、上高森遺跡の「埋納」遺構の写真を見せたり、それまでの発掘の「業績」を示したりして、その上に教科書が書かれていることを認識させる。ここまでで感想を聞くと、生徒は「このような研究の上に教科書の記述がなされている」などと感心する。展開1-②でプリントBを読ませ、何か変だなと気付かせることが重要である。ねつ造という事実自体の提示は生徒にとってインパクトが非常に強い。それをいきなり出さず、ねつ造が教科書にも影響を及ぼしていることを確認してもらうためにも、展開1-②は大事である。また時間があるようであれば、プリン

トAの『日本の歴史』記述を再読させるとよい。改めて読むと、この発掘現場におけるある種の不自然さを生徒たちに気づかせることができる。次の展開2を考える参考とすることができる。

展開2は基本的に講義調となってしまうため、展開2-①②の発問で十分に考えさせ、問題意識を持たせることが大事である。2011年度実践では、パワーポイントを用いて発掘調査現場の写真や実測図等を見せることで、考古学の方法論をよりイメージを持った形で理解させることができたと思う。

展開3は、展開1が盛り上がると、なかなか取り上げる時間が持てない。2010年度実践ではこのあたりは、あまり時間を割くことができなかった。本人の動機ではなく、環境の問題としてとらえることを目的としている。考古学のみならず、学問全体がそのような不安定な環境の下におかれていることを理解させたい。

3. 成果と課題

あらためて本授業のねらいを確認すると、それは(1)歴史像は史資料(文字・遺物)によりつくりあげられていることを理解させる、(2)史資料の取り扱い方に問題があれば歴史像は歪んでしまうことを理解させる、(3)考古学の方法論とその問題点を理解させる、ということであった。そのためのショック療法的な授業実践を試みたわけである。

2010年度実践のワークシートでの生徒の感想には、「初めはすごい人だと思ったけど、ねつ造だと知っておどろきました。現代でもそれが真実かどうかをちゃんと確かめなくてはいけないと思いました」「ねつ造をしてまで発掘がしたかったのかなと思いました。学術調査では再発掘しにくいと分かったけど、共に発掘していた人は90%以上の確率で発掘できていたことを少しも疑うことがなかったのかなと思いました」「ねつ造の問題について、ねつ造されたものが教科書に載って、それを勉強していた人はどうするんだろうと思った。たくさん見つけることによって、それを疑うとか、もっと深く調べるとか、研究のゆるさが目立つと思った」といったものがあつた。展開3に時間が割けなかったこともあって、ねらい(3)はうまく達成できなかった。

2011年度実践では展開③にも配慮した結果、「遺跡発掘は形や色だけが重要なのではなくて、埋まり方も重要だと知りとても納得できた」「ねつ造は驚いた。しかし考古学における発掘調査への支援の少なさを考えると仕方ないかなと思った」などといった感想が出てきた。

このようなSLPⅡにおける一連の授業はいわゆる史科学という分野に該当するが、それをどのように高校生に教えていくか、そのために興味を持たせる素材をいかに探していくか、科学的な思考への抽象化・一般化をどのようにしていくかという点は、今後の課題である。

時間	指導内容
展開1 20分	1、捏造について ①プリントAを配布する プリントA(『日本の歴史』)を読ませる プリントA(捏造前の教科書)を見せる →発掘の「成果」が教科書に反映していることを確認する 感想を聞く ②プリントBを配布する プリントB(捏造後の教科書)を見せる →プリントAの教科書とどこが違っているかを聞く ③毎日新聞2000年11月5日を見せる 感想を聞く
展開2 20分	2、どうしてねつ造ができたのか～考古学の方法論～ ①発問「ここまでで疑問に思ったことはないか」 ②発問「どうすればねつ造を見破ることができるのだろうか」 →なぜねつ造を見破ることができなかったのか ③考古学の方法論について話す 緊急調査と学術調査 発掘調査の具体的な方法 調査報告書の執筆 遺跡の発掘は遺跡の破壊である
展開3 10分	3、なぜねつ造をしたのか～考古学を取り巻く環境～ ①プリントB(発掘捏造)を読ませる →ポイントの確認 ②その他の問題の確認 マスコミ報道の問題・学界の問題など ③ワークシートへの感想記入

(本稿は、2011年度全附属高校部会教育研究大会の社会科学分科会で報告したものを文章化したものである)

【参考文献】

中尾浩康「歴史を学ぶ時の視点—「旧石器発掘捏造事件」から考える」(『歴史地理教育』772 (2011年03月増刊号)、2011)